

## 批評と紹介

山西省社会科学院家譜資料研究中心編

### 中国家譜目録

山根 幸夫

最近、中国史研究の上で、家譜（又は族譜、宗譜）の資料としての重要性が注目されるようになった。さて、わが国の研究所、図書館には、どれだけの家譜が収蔵されているのであろうか。多賀秋五郎『宗譜の研究（資料編）』（東洋文庫、一九六〇）によれば、東洋文庫は八一八部、国立国会図書館は約四四〇部、東大東洋文化研究所は二三七部、京大人文科学研究所は五部、他に牧野巽文庫は一八部を所蔵している。以上の中には重複するものもあるので、それらを除くと、わが国には一二〇八種の家譜が存在することになる<sup>1)</sup>。

『ユタ系図協会中国族譜目録』（日本・近藤出版社、一九八八）によれば、ユタ系図協会（モルモン・チャーチ<sup>2)</sup>）では、日本をはじめ、台湾、韓国、香港、米国、英国等に収

蔵されている家譜を、マイクロ・フィルムで蒐集し、その部数は二八一一部にのぼっている。但し、この中には、中国本土に存在する家譜は含まれていない。従来、北平図書館善本に収められているものを除くと、中国の家譜の存在実態は明らかにされていなかった。

今般、家譜資料研究中心<sup>3)</sup>によって、同センターに収められている中国家譜のマイクロ・フィルムの全容が明らかにされたことは非常に喜ばしい。尚、中国社会科学院歴史研究所図書館にも二千部をオーバーする家譜<sup>4)</sup>が収められている由であるが、同所を訪れてカードを探索する以外、その実態を知ることができない。

さて、本目録の編纂に従事したのは、山西省社会科学院文化研究所の馬志超、劉西井、劉晉井、劉寧、及び図書館の王莉亜、万毅、王愛蘭、周萍の諸氏であり、全体を統括したのは馬志超氏とのことである。家譜資料研究中心が所蔵する中国家譜のマイクロ・フィルムは全部で七七六リール、各リールには三〇〇〇齣を収め、併せて二三三万齣、二四五六二冊にのぼると云う。著録されている家譜は二五六五部<sup>5)</sup>で、現在までに公表されているものとしては、米国ユタ系図協会収蔵の家譜コレクションと匹敵するものである。但し、その部数のみの問題でなく、内容が問題であり、此処には明代の家譜が多数存在している（後述）。

著録された姓氏は二五一氏に達し、最多のものは二五五部の王氏で、次に陳氏の二二六部、張氏の一一四部、李氏の八五部、呉氏の七七部、劉氏の七五部、黄氏の六九部、徐氏の六三部、朱氏の六〇部等が多い部類に属する、他方、一氏一部のみのものもかなり見られる。地域的に見れば、台湾、新疆、西藏、吉林を除く各地域の家譜があり、二〇〇部以上に達するのは、江蘇、浙江、福建、湖南、安徽等の各省である。いわば、経済的、文化的に先進地域では、多く家譜が編纂されていたと云えるのではなからうか。

目録の排列方法は、姓氏を綱とし、地区を緯とし、又編修時期の先後を以て並べている。このようにすれば、姓氏と家譜の地域分布を見ることができ、また修譜の年代順序を知ることができるからである。

姓氏の排列は、その姓氏の筆面の少ないものから順序に並べ、同一字画であれば、筆形の横(一)、豎(丨)、点(丶)、撇(ノ)の順序としている。

地域の排列は、北京、天津、河北、山西、内蒙古、遼寧、吉林、黒竜江、上海、江蘇、安徽、福建、台湾、江西、山東、河南、湖北、湖南、広東、広西、四川、貴州、雲南、西藏、陝西、甘肅、寧夏、青海、新疆の順としている。特別市の北京、天津、上海を別置したことは、歴史研

究の上で便利であるか否かは別問題である。

次に、時代的な排列は、刊刻年代の前後を以て順序としている。王朝名のみ記されていて、年号のないもの、或いは年代の記されていないものは、その王朝期の最前に置いている。

家譜各書の記述の方法を紹介するため、次に一例を挙げてみよう。

崇川丁氏族譜十三卷

〔清〕丁若浮修 道光十三年木刻本 十二冊 五  
一九頁 10N 361-1

右の如く、最初に書名・巻数を掲げ、次に編修者(王朝名)、刊刻年(或いは抄写年)、最後に冊数および頁数を記している。最後の数字は、家譜資料研究中心の分類検査番号である。書名・編修者名は完全に同じであっても、刻本、冊数、或いは頁数の異なるものは、一応別本として併記した由である。この結果、家譜の総部数が実際よりも増加していることも考えられる。

前述した如く、本書に掲げられている家譜の中、明代に編纂されたものが多いことは注目すべきである。日本に現存している家譜は、清代後半、或いは民国期のものが多いことと思ひ合せてみると、やはり中国には古い家譜も残っているものだという感を深くする。次に、明代に編纂され

た家譜をリスト・アップしてみよう。但し、明代に纂修されても、清代に続修されたものは除くこととする。

丁氏族譜 (明) 丁儀纂修 抄本 二冊

新安琅琊統宗「王氏」世譜十卷首一卷 (明) 王應斗纂

嘉靖間木刻 五冊

積庫王氏宗譜 (明) 佚名纂修 嘉靖十三年 抄本 一冊

開闢忠懿王族譜 (明) 王琨纂修 一九五八年王氏家藏

本に拠る抄本

王氏家譜 (明) 王修等纂修 弘治五年本 一冊

淪川方氏族譜不分卷 (明) 方柱修 万曆四年抄本 一冊

莆陽刺桐金紫方氏族譜 (明) 佚名纂修 崇禎十五年重

修 一九六四年明刻本により手抄 四冊

涑水司馬氏源流集略八卷 (明) 司馬晰修 万曆一五年

刻本 四冊

歙北嶺陽江氏宗譜 (明) 佚名修 明代刻本 一冊

広陵孟城仲氏家乘不分卷 (明) 仲代助修 崇禎一五年

刻本 四冊

伊氏世家譜 (明) 伊慶鎔・伊六璧等修 嘉靖九年刻本

一冊

徽城朱氏譜 (殘) (明) 朱世恩修 嘉靖三四年刻本による抄本 一冊

紫陽朱氏建安譜 (明) 朱瑩修 万曆四八年刊本の影印本

三田李氏統宗譜不分卷 (殘) (明) 李暉修 万曆四三年

刻本 一冊

李氏家譜 (明) 李亓奇修 抄本 二冊

付御吳公家伝 (明) 劉飛修 崇禎刊本 一冊

臨溪吳氏族譜四卷付一卷 (明) 吳元孝修 崇禎一四年

刻本 三冊

汪氏足征録五卷 (明) 汪尚和輯 抄本 一冊

汪氏統宗譜 (明) 佚名修 隆慶三年刻本 一冊

靈山院汪氏十六族譜十卷 (明) 汪道毗修 万曆二二年

刻本 一冊

汪氏統宗正脉二八卷首一卷 (明) 汪雪程修 隆慶刻本

十冊

岩鎮汪氏家譜 (明) 汪尚奇修 万曆二七年 刻本 一冊

瑞溪金氏族譜二八卷 (殘) (明) 金応宿修 隆慶二二年刻

本 二冊

清源金氏族譜 (明) 金氏修 抄本 一冊

明経胡氏宗譜不分卷 (明) 佚名修 嘉靖二二年刻本

一冊

休寧范氏族譜九章 (明) 范涑修 万曆刻本 九冊

洪氏系譜不分卷 (明) 洪一諱修 清抄本 一冊

俞氏統宗家譜 (明) 俞文耀等修 隆慶間修抄本 一冊

余姚孫境世系譜存二卷 (明) 孫如河等修 万曆三十六年修抄本 二冊

姚江徐氏宗譜八卷 (明) 徐生祥修 万曆間修 光緒十年刻本

唐御史張中丞公完節錄四卷 (明) 陳幼學編 旧抄本

二冊

張氏統宗世譜二二卷 (明) 張憲修 嘉靖九年抄本 一

〇冊

洪州張氏世系 (明) 張經修 一冊

涇川張氏宗譜三卷 (明) 程文綉修 万曆刊刻本 三冊

新安休邑由潭黃氏支譜 (明) 佚名纂 明修本 一冊

新安黃氏會通譜一六卷 (明) 黃獲・程天相纂 明刻本 四冊

黃氏家譜 (明) 黃鳳騰・黃承運修 万曆二十四年刊本 一冊

莆陽黃巷黃氏族譜不分卷 (明) 黃汝良修 清初抄本 一冊

黃氏宗譜 (明) 佚名修 明抄本 一冊

曹氏家乘 (殘欠) (明) 佚名修 明刻本 一冊

休寧曹氏統宗譜一五卷 (明) 曹誥修 万曆四一年刻本 七冊

虎墩崔氏族譜 (明) 崔三錫修 万曆刊刻本 八冊

統編許氏族譜 (明) 許以夷修 正二二年修 抄本 一冊

靈宝氏父子四尚書圖像付譜略 (明) 許俟書修 万曆一五年刻本 一冊

五年刻本 一冊

河內寧氏族譜 (明) 寧笏修 万曆一五年刻本復印 二冊

休寧蔣二溪程氏宗譜二二卷 (殘) (明) 程蒼芳修 嘉靖間刻本 一冊

間刻本 一冊

十萬程氏會譜一〇卷 (明) 程燻修 嘉靖二八年刻本 一冊

新安程氏統宗遷徙纂譜不分卷 (明) 程項修 嘉靖四二年本による抄本 一冊

率東程氏家譜二二卷付上草市宗譜一卷 (明) 程良錫修 隆慶間刻本 一冊

休寧率口程氏統編本字譜六卷 (明) 程時用修 隆慶六年刻本 二冊

歙西岩鎮百忍程氏本宗信譜一二卷付一卷 (殘) (明) 程弘賓修 万曆一八年刻本 四冊

続葛氏譜不分卷 (明) 佚名修 明手抄本 一冊

歐村歐陽氏族譜不分卷 (明) 歐陽慎齋修 明末清初抄本 一冊

婺源桃溪潘氏族譜三卷付録二三卷 (明) 潘愚澹修 正徳刊刻本 一冊

掌庵譜略 (明) 鄭鳳超修 南明隆武間抄本 一冊

休寧呂邑劉氏族譜六卷 (明) 陳有守・劉堯錫修 嘉靖三七年刻本 二冊

休寧戴氏族譜一五卷 (明) 戴堯天修 崇禎五年刻本 一〇冊

王源謝氏孟宗譜一〇卷 (明) 謝惟仁修 嘉靖一六年刻本 二冊

謝氏統宗譜一卷 (明) 謝友可修 万曆二九年刻本 一冊

夥北南陽韓氏宗譜 (明) 佚名修 万曆間修 抄本 一冊

右の如く、家譜資料研究中心に収集されている家譜の中に、六〇部の明代に編修されたものを挙げる事ができる。数え方によれば、もう少し部数が多くなるかもしれない。それに比べて、前述の如く、日本には一二〇〇余部の家譜が存在するが、その中には明代の家譜は僅かに一三〇部存するのみである。私が明代の家譜にこだわる理由は、家

譜は大抵時代を隔てて何度か続修されたが、その場合、以前の家譜をどれだけ忠実に継承されているか否かの問題がある。恐らく続修された後世の家譜は、必ずしも忠実に前代の家譜を踏襲してはいないのではないかと考えられる。私たちが日本で閲覧できるのは、清代、特に清末、あるいは民国期の家譜である。より古い形の家譜を見ることができれば、殊に明代史の研究者にとっては、裨益される処多大であるに違いない。

然し、私たち外国研究者にとつては、中国へ赴かなければ、この明代の家譜も利用できない。序文には「本中心にはマイクロリーダー、プリンターを備えつけており、読者は需要に基づいて、随時プリントすることもできる」とある。然し、私の望みたいことは、家譜資料研究中心に赴かなくても、又海外からの需要に対しても、中心所蔵の家譜をプリントして下さることである。今すぐにはできなくても、将来外国の研究者にもこの様な便宜を与えて頂きたい。こうした完備した家譜センターが成立し目録が刊行された以上、それも可能な筈である。

現在、中国家譜資料中心には、二五六五部にのぼる家譜のマイクロ・フィルムが収蔵されているが、中国全土についてみれば、尚この何倍にも達する家譜が存在するものと思われる。資料中心や中国社会科学院歴史研究所図書館

あるいは北京図書館等に取められていない家譜が、県・市単位の図書館には蔵されていたり、まだ公的機関に移されていないものも多数あるようである。南炳文、川越泰博訳『永楽期の移民——広宗県の場合』（明代史研究二一、一九九三）によれば、「広宗県に現存する資料の……家譜類は、前に列挙したのは五九種であるが、実際に広宗県の民間に現存して図書館に収蔵されていない家譜類の資料ははるかにこれを上回る。たとえば、私の家譜の南氏家布やわが外祖父の家族の薛氏家布は、村名の起源や変遷と関係ないので、報告に引用されていない。関係情況をもとに見積ると、広宗県の民間に現存し、図書館に収蔵されていない、家譜類資料は、決して一千種を下らないはずである」。

右の如き南炳文教授の報告によれば、中国各地で民間に私蔵されたままになっている家譜の部数は、実に膨大な数字になるものと思われる。幸い中国家譜資料中心は、現物の家譜を集めるわけではなく、撮影してマイクロ・フィルムを作成するわけであるから、より広範囲に家譜の収集が可能になるのではないかと思われる。資料中心では、できる限り多数の家譜を収集し、利用者の便宜をはかって頂きたいものである。

因みに、太原には中国家譜資料中心と並んで〈中国家譜研究会<sup>9)</sup>〉が存在している。この学会は一九八八年に成立

し、中国家譜研討会を開催すると共に、機関誌として『譜牒学研究』（主編は武新立氏）を発行し、現在第三輯（一九九二年十二月）に及んでいることを紹介しておきたい。

## 註

(1) 例えば、元代に編纂された『新安大族志』等は、家譜に加えるのは適切でないと判断したので、この中に数えなかつた。

(2) モルモン・チャーチは正式には末日聖徒イエスキリスト教会と称する。『聖書』よりも『モルモン経』を重んずる。米国ユタ州を中心に、数州に信徒が集中しているが、彼らは家系を重んじ、自己の系図を作るのに熱心である処から、ユタ系図協会も成立したのであろう。

(3) 家譜資料研究中心には、山西省社会科学院の一部局として成立したもので、中国における家譜研究のセンターである。その外郭団体として〈中国譜牒学研究会〉が存在し、『譜牒学研究』（不定期刊）を刊行している。

(4) 歴史研究所の家譜コレクションについては、武新立氏が同所に在任中、直接に教示された。その中には元代に編纂された家譜も、若干あるとのことである。

(5) 本目録に収められている『清皇室四譜』『八旗通譜』、あるいは「統譜」の類は、この部数に加えなかつ

た。筆者は厳密な意味での「家譜」を考えたかたからである。

(6) 日本に現存する明代家譜には、嘉靖年間二部、隆慶年間一部、万暦年間八部、天啓年間一部、崇禎年間一部、計一三部ある。

(7) 中国の地方志の例を見ると、忠実に前志の記述を踏襲している場合もあるが、逆に前代の記事を改めている場合もある。それ故、明代の史実を考察する場合には、清代の地志よりも明代の地志を利用の方が有効であるのと同様、同一姓氏の家譜であっても、より古い家譜の方が歴史研究に役立つと思われる。

(8) 南炳文「永樂期の移民——広宗県の場合」一九頁。

(9) 中国譜牒学研究会については、中国譜牒学研究会秘書処編『中国譜牒学研究会々刊』（一九九一・一〇刊）があり、同研究会の成立以来の経過を紹介している。同会の会長は劉貫文、副会長は馮尔康、張海瀛、秘書長張海瀛（兼）の諸氏である。

（一九九二年四月、太原、山西人民出版社、A5判、五九〇頁）

陳柏堅主編

## 広州外貿兩千年

山根 幸夫

一九八七年九月、広州で「海上糸綯之路」學術研討会が開催され、多くの報告がなされた。それらの論文を各方面から検討し、補充・修正の上、広州文化出版社から刊行されたのが本書である。巻頭に、張伯華「鑒古觀今、啓迪未來——祝広州外貿兩千年」一書出版の一文、及び武増幹、鍾建明の序言が掲げられている。所載論文は次の通りである。

- (1) 秦漢前広州口岸海外貿易之蠡測 張一農（河北財經學院）
- (2) 沈睡了兩千多年的広州海上糸綯之路 陳幹強（広州市對外貿易局）
- (3) 漢代番禺的水上交通与考古發現 麦英豪（広州博物館）
- (4) 市舶使設立前之海外貿易管理 鄧端本（広州市社会科学院）
- (5) 略論古代広州外貿的對外開放 陳柏堅（広州市對外貿易局）